試　訳

# フィヒテ著『フリードリヒ・ニコライの生涯と奇妙な意見』（1801 年）(4)

勝　西　良　典

## 解題

以下に訳出するのは，ヨーハン・ゴトリープ・フィヒテ著，A・W・シュレーゲル編『フリードリヒ・ニコライの生涯と奇妙な意見。前世紀の文学史ならびに幕開けしたばかりの今世紀の教育学に関する論考』（*Friedrich Nicolai's Leben und Sonderbare Meinungen. Ein Beitrag zur Litterargeschichte des Vergangenen und zur Pädagogik des angehenden Jahrhunderts*, 1801）の第 8 章から第 9 章である。底本には，アカデミー版全集（*J. G. Fichte—Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, Reihe I, Bd. 7, hrsg. von Hans Gliwitzky und Reinhard Lauth, Stuttgart 1988. 以降，GA I/7 と略記）所収のテクストを用いた。訳文中の［　］は訳者による補足であり，訳文の欄外の数字はこの版のおおよその頁付けを示している。また，原注は章末に，訳注 は脚注として示している。

ここで前々回（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第 18 号，2019 年 3 月，61–86 頁）の誤植を以下のように訂正させていただきたい。

・69 頁 5 行目；69 頁，訳注 20，8–9 行目；71 頁 2 行目；74 頁 16 行目
　誤『クセーニエ』 → 正『クセーニエン』

## 訳文

### 403 第8章　かの最高原則に基づく，我らが主人公が有する彼と彼の敵対者双方の正しさにかんする奇妙な諸概念

先に述べたように，我らが主人公は，自分が絶対に正しく，すべての人たちも同じく少なくともこころの中では彼が正しくないことなどありえないという同一の確信を持っていると決めてかかっていた。だから，彼が敵対者を大まじめに叱っている内容がまさしく彼自身がつねにやっていたことだった，いや，もしかすると彼自身が敵対者を叱っている瞬間にやっていたかも知れないことだった，などということはまれなことではなかったのである。すなわち，我らが主人公からすれば，こう考えるのが当たり前なのだ。なるほどニコライは当然そうすることが許される。なぜなら，彼は正しいからだ。しかしながら，私たちの場合にはそれは許されない。なぜなら，私たちはもちろん正しくないからだ。

さて彼は，有名な文書において，寛大な同情の念を込めて，カントを称賛し，ラインホルトを称賛したことはイェーナの一般文芸誌の宿命となった，と報じた後，数ページ後で同情することなくむしろ自慢しながらこう言っていた，当の彼の一般文芸誌は新しい哲学や最新の哲学といったものの前につねに立ちはだかっていた，と[原注(1)訳注1]。［この点にか

---

訳注1　*Neue allgemeine deutsche Bibliothek*, Bd. 56, S. 147.「約12年から14年前には，批判哲学によってすべての哲学が論じ尽くされ完成されたと言われていた。批判哲学は人間の悟性でもってする計算を完結したのであり，みずからの悟性を諦めようとしないものならだれでもこの哲学を無条件に受け入れる以外に道はなく，受け容れないものについては，この哲学を理解していないのだ，と言われていたのだ。『一般文芸新聞』（*Allgemeine Literatur-Zeitung*）がこの語調を最初に採った。このことは否定できない。イェーナでも批判哲学が非常に完全なものだとみなされていたが，そこではこの哲学をラインホルト教授殿が絶大な喝采を博しながら教えていたのでそれだけ一層そのようにみなされていた一方で，この哲学は感覚が鋭いこの哲学者の表象能力の理論によってなおも完全性の度合いを上げる定めにあったのだ。このこともまた否定できない。この新しい完全性が仰々しく予告されていたことは，その当時の書評から窺い知ることができ

んしては,］何かを支持することもこれに抗することもつねに両方とも党派性であり，どっちもどっちであると考えるべきなのだ。── そうだ，しかしながら，新しい哲学や最新の哲学といったものはもちろん偽である。なぜなら，そうでないとしたら，ニコライの言っている古いことは 404
真理ではないことになり得るだろう。したがって新しい哲学や最新の哲学といったものの前に立ちはだかることは無論のこと賞賛に値することであり，こうした哲学を称賛することは大いに非難すべきことなのである。

同じ文書において彼は，シェリング，A・W・シュレーゲル[訳注2]，フィヒテの各氏に対して，自分たちの著作にかんする有利な評価をイェーナの一般紙に持ち込もうと努力したことについて，それどころかフィヒテ氏に至っては一般叢書誌を自分に好意的なものにしようと努めたことについて弾劾していた[訳注3]。さて，事情がこういうことであったのだとし

---

る」。併せて，次の箇所も参照。「『ドイツ百科叢書』は周知のように，新しい哲学や最新の哲学といったものに取り組んでいる間ずっと，流行の哲学に阿諛追従するという，新しい知恵や最新の知恵といったものを支持する側に籠絡されたほとんどすべてのジャーナルやビラが犯した罪を犯すことによって我を忘れることはなかったし，思わず新しいものを新しいからという理由で盲目的に受け入れたり，新しいものを古くないからという理由で軽蔑したりすることもなかった。この叢書はむしろ，無批判に受け売りをするのではなく反論の根拠を明らかにする，知恵ある反対の立場に留まっていた。そうした方が新しく湧き起こった体系を畏敬の念から喧伝したり受け売りしたりするよりも真正の哲学すなわち哲学的熟慮とその探究に対して道が開かれることは確実である。多くのジャーナルがこの体系に異論を唱えることがどうしてもできなかったのは，そうしてしまうと流行遅れと見なされてしまうかも知れないからである。こういったことを踏まえて，『ドイツ百科叢書』は新しい哲学者たち，とりわけ最新の哲学者たちであるフィヒテに与する哲学者たちに対してもつねに見事に立ちはだかっていたのである」(S. 160)。Vgl. GA I/7, S. 403 Anm. 1. なお，*Neue Allgemeine deutsche Bibliothek*（『新ドイツ百科叢書』）については，以降，NADB と，『一般文芸新聞』(*Allgemeine Literatur-Zeitung*) は ALZ と略記する。

訳注2　NADB, Bd. 56, S. 153 ff.

訳注3　NADB, Bd. 56, S. 159 fg. 併せて，本書第 5 章訳注 59（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第 18 号，2019 年 3 月，84-85 頁）参照。Vgl. GA

ても（細部の筋道を追う当時の歴史研究者たちの中で，さらに今では忘れ去られてしまったあの物書きの境遇について詳論することにも心血を注いだ者は異口同音に，この境遇によってあの弾劾が真実であることは変わることなく否認されるであろうと断言している），たとえそうだったとしても，彼らのそんなところをはなはだしく悪く解釈することは，かの哲学にとって好意的でない書評，それゆえまさに彼自身に好意的な書評のみを自分の叢書に掲載していることを自慢しているニコライにとって当然のことだったのだろうか。これにかんしてあの頃周知であったことに触れておくと，彼はイェーナの一般文芸紙にも同一の原理を不当に要求し，かの文芸誌の名代のひとり[訳注4]をある件で遠慮なしに叱責していたのだ。しかも叱責した理由は，フィヒテの２，３の著作についての書評をラインホルトに書かせた[訳注5]からだというのである。つまり，むしろある人物 ──「かのフィヒテの哲学の弱点を非常に適切に暴いた者」── に任せればよかったのにそうしなかったということだ。しかしながら一体全体，かの人々に対していまだに正しくないという言葉は，ニコライ自身によっても掛けられていないのではないか。彼ら個人としては残念ながら感染してしまっている自分たちの忌まわしい意見という毒を，今度はまた，公刊された文献という神聖な泉を介して公衆にももたらそうと努力し，ひとりで引きこもって自分自身の病気を治してもらうことはなかった彼らだが，これは恥ずかしいことではなかったのではないか。

とりわけフィヒテに対しては，かの文書において深刻な罪過の数々がこんこんと説いて含めるようにしたためられている[原注(2)][訳注6]。「彼は

---

I/7, S. 404 Anm. 3.

訳注4　アカデミー版全集の編者によると，シュッツ（Christian Gottfried Schütz, 1747–1832）か G・フーフェラント（Gottlieb Hufeland, 1760-1817）。Vgl. GA I/7, S. 404 Anm. 4.

訳注5　ラインホルトが書いたのは，知識学の書評（ALZ, Nrn. 5-9, 4.-8. Jan. 1798, Coll. 33-69）と『自然法の基礎』の書評（ALZ, Nrn. 351-354, 19.-21. Nov. 1798, Coll. 449-480）であった。Vgl. GA I/7, S. 404 Anm. 5.

訳注6　NADB, Bd. 56, S. 147.「彼［すなわち，フィヒテ］がイェーナでラインホルトのポストに就き，この並々ならぬ敬愛を受けていた先生のことをここ

イェーナでラインホルトのポストに就いた」（骨董品の鑑定家によるこの重要な職位についての説明がいくつかあるが，いずれも私たちを満足させるものではなく，したがって，そこにはかの男の最大の犯罪的行為が非常にわかりやすいかたちで含まれているかも知れないが，不可解なものとして無視しなければならない）「彼はこの並々ならぬ敬愛を受け 405
ていた先生のことをイェーナの学生に短期間でほとんど忘れさせるすべを心得ていた」。我らが主人公はどのような手段をここでこの男が用いているのかについて補足説明を行わなかった。しかしながらいずれにせよ，ここからおおよそ，その人物には教師の才能が全面的に欠けていたわけではないという結論に達するのが当然であろう。これはやはりおそらく彼の不正行為ではないのではないか。── もしかすると，彼がしたことはあの才能の悪用に過ぎないのではないか。しかしながら，彼が忘れさせたラインホルトは無論，最高の年代記作家たちの情報によると，自身がカント主義者だったのであり，たったひとつの真の叢書との付き合いはまったくなかったのである。このような人物を忘れさせたことはフィヒテの不正行為とはなり得ない。── さらに読み進めてみよう。「今や」（ここで寛大な人物が被告人の罪を軽くしていることはまったく歴然としている。最高の情報によると，フィヒテは，学生にラインホルトのことを忘れさせることに成功した後はじめてではなく，それどころかイェーナに着任する前にすでに一冊の著作[訳注 7]を書き，印刷に回していたのであり，その中でずばりカントの哲学を未完のものだと説明し，ラインホルトの努力についてひたすらていねいに論じ，そして彼の目論見をはっきりと示していたのだ。）「今やかの男には，ドイツの哲学者の

---

の学生に短い間でほとんど忘れさせることができた後ということもあるが，また，大学の先生，とりわけ新しい思弁を教えるものはときおり，自分の聴講者を学識者の共和国の不可欠の構成要素とみなすという誤謬に陥るものでもあるので，今や彼には，ドイツの哲学者のなかの第一人者であるカントに提供されていた最高級のポストからカントを引き摺り落とし，そして自分がそれに就くことも簡単なことだと思われたのだ」。Vgl. GA I/7, S. 404 Anm. 6.

[訳注 7]『知識学の概念について』のこと。その「序文」参照。Vgl. GA I/7, S. 405 Anm. 7.

なかの第一人者であるカントに提供されていた最高級のポストからカントを引き摺り落とすことも簡単なことだと思われたのだ」[。] 我らが主人公は今まで一度も語っていないし，ここでもそのことに同意して語っているわけではないのだが，カントにこの最高級のポストが提供されていたというのだ。カントをこのポストから引き摺り落とすことは，彼が晩節の文学活動のすべてを懸けて絶え間なく努力していたことであった。そうすると，なるほどニコライとフィヒテは思っている以上に意見が一致しているなどということになるし，ニコライは一緒にひとつの目的に向かって邁進していることについて，フィヒテをもはや非難できなくなったということにもなるのだろう。それはともかく先に進もう ――「そして自分がそれに就くこと」。ほうそうか，これがフィヒテの望みだったのか。そしてここに彼の行為の犯罪性があると。彼がラインホルトを忘れさせたことは立派なことだったし，彼がカントを最高級のポストから引き摺り落としたことは功績だったのだ。彼はただカントが占めていたポストから離れて，ドイツの哲学者のなかの第一人者によってとっくの昔にすでに占められている真の最高級のポストがある，あの叢書の仲間のもとへ自分で戻って来て，自分の書いたものをそこに送りさえすればよかったのである。そうすれば，彼にはおそらく惜しみなく学問上の喝采が贈られていたことだろう。彼は好ましくない誤謬からずっと守られ続けたであろうし，ラインホルトのポストを終生守り続けたであろう[訳注8]。そして彼の名前は叢書のメンバーのなかの別の有名な名前の下で今なお生き残っていることだろう。

406　同じ文書やそれ以外にもいくつかの場所でニコライはシェリングとフィヒテのことを大まじめに叱っているのだが，それは，無礼にも彼らからときおり敵対者に対して，中途半端な頭脳しか持ち合わせていないといったような言葉が漏れていたからである[訳注9]。このようなことが

---

訳注8　暗に 1799 年春の罷免のことを指している。Vgl. GA I/7, S. 405 Anm. 8.

訳注9　NADB, Bd. 56, S. 176.「彼［すなわち，フィヒテ］の目は真っ赤に燃え，中途半端な頭脳，やくざ者のすること，悪ガキのすること，といった言葉が彼の口を衝いて出てくるのだ！　最初の言葉は，シェリング氏もたびたび敵対者を名指すために用いている」[傍点大文字]。シェリングはたとえ

あったのは確かだが，知られているかぎりではつねに，彼らが一般論を展開している場合だけであり，名前を挙げて特定の人物に反論している場合にはそのようなことは断じてなかった。確かにこれらの物書きは数年来，根本的な諸部分に従って完成され，完全に証明され，基礎づけられた一個の体系を公衆に呈示してきた。今度は同じ体系とまじめに取り組まない理由について，彼らはあの時期に至るまで，最初の合理的な言葉を公衆から聞かなければならなかった。彼らに敵対する者はだれも彼らを理解しなかったし，みながくだらないことをぺちゃくちゃしゃべっては，彼らに対して，10 回，11 回と何度も同じ誤解を聞いては退けると

---

ば「啓示と成人教育について」，『ドイツ学術協会哲学ジャーナル』（*Philosophisches Journal einer Gesellschaft Teutscher Gelehrten* (Bd. 8, Ht. 2, Jena und Leipzig 1798, S. 157). 以降，『哲学ジャーナル』（*Philosophisches Journal*）と略記）で，「中途半端な頭脳を持つ輩たち」と語っている。さらに，本書の「序論」の訳注 4（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第 17 号，2018 年 3 月，107 頁）に挙げたニコライの一連の書評の以下の文章を参照。「今，フィヒテ氏の哲学がカントの哲学とちょうど同じように完成されたものとなった，とはいえ，非常に一般的に賞賛されているという状態からはほど遠いのであるが，とにかく完成後の今，彼の意見がはっきりと確認される。彼曰く，カントはそもそもきわめてわずかなことしか成し遂げていなかった。しかしながら，彼は自分の知識学でもって，シェリング教授殿は自分の超越論的観念論の体系とそれに基づく思弁的自然哲学とでもってすべてを成し遂げたというのだ。このことは，両氏によって哲学がはじめて基礎づけられただけでなく，自然が創造されたことに現れており，フィヒテと比べればカントは善い意志を示す以上のことはあまりしておらず，せいぜいのところ下準備を若干しただけであるし，シェリングと比べれば意図も能力もなかったというのである。両氏はカントを ── そして，彼らにとってはいずれにせよ，言及する必要のないまったく取るに足らないものである他の哲学者たちを ── はるかに凌駕しているとうぬぼれているが，このことは，彼らが自分たちの著作で採っている語調から歴然としている。これまた十二分に見て取れることだが，これら両氏が哲学における一角の人物である限り，カントのことを一角の人物とするのはやはりとんでもないことなのだ。このことは，フィヒテの基礎の上に今や完全なものとして築かれたシェリングの超越論的観念論の体系のことを哲学上のヨーヨー［ノルマンディの流行のおもちゃ］以上に一角のものとみなしている者ならだれしも認めることだろう」（NADB, Bd. 56, S. 147-148）。Vgl. GA I/7, S. 406 Anm. 9.

いったことを繰り返すよう要求していたのだ。こういったありさまであっても，憤懣遣る方無い中でもときおり何か人間的なことが起こってくれれば，彼らにとってはもしかすると受け入れられることだったのかも知れない。［だが，］ニコライは彼らのことを名指しで，また彼らと同時に，実名を挙げられたさらに別の大勢の人々のことを，公刊された著作の中でひねくれ者呼ばわりし[訳注10]，なおもその他のさまざまな罵詈雑
407 言を彼らに浴びせたのである。頭で或ることを組み立てることと別のことを組み立てることとはどっちもどっちであり，まだおそらく十分に成長の余地がある中途半端な頭脳という名称は，完全にねじ曲がって斜向きにひねくれてしまった頭脳という名称よりもずっと穏やかなものである，と言わんばかりに。こういうわけでニコライはかなり見事に目には

---

訳注10 ニコライ『フリードリヒ・シラーのミューズ年鑑1797年版に対する補遺論考』（*Anhang zu Friedrich Schillers Musen-Almanach für das Jahr 1797*, Berlin und Stettin 1797. 以降，『補遺論考』と略記），48頁。「あるいは，それ［cf. 哲学的悟性が普通の悟性を涵養するものにかんして貧相なほんのささいなことしか摑んでいないということ］が実際にあなた［すなわち，シラー］の意見だったのだとすれば，あなたの哲学的悟性一般についての評価はまさしく，フィヒテ，グレフ（Gräff），ペーリツ（Pölitz），ニートハマーやその他の批判的ひねくれ者たちのような人々が貧相な抽象的悟性を嘲笑すべき仕方で普通の人生に適用していることについて私が主張していたことと同じだということになりましょう」［傍点イタリック］。同書，139頁。「哲学的ひねくれ者たち，彼らは世界を自分たちの形式的哲学を用いて全く別の基盤の上に置きたがっており，実際のところすでにそこまでは達しており――そんなことが可能だなどと信じてよいものだろうか――『経験――すなわち，感官によって認識される全自然――はその形式に従うものである』と称していた。したがって彼らは経験を必要としないし，経験の知恵は彼らの自我によってはるかに凌駕されていたのであった」［傍点イタリック］。併せて，本書第3章の訳注32（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第18号，2019年3月，75頁）も参照。Vgl. GA I/7, S. 406 Anm. 10.

ちなみに，グレフェ（Johann Friedrich Christoph Gräffe, 1754-1816）はプロテスタントの神学者。ペーリツ（Karl Heinrich Ludwig Pölitz, 1772-1838）はライプツィヒ大学教授（哲学・歴史学・政治学）で，カントの講義録を2冊（形而上学と哲学的宗教論）出版した。ニートハマー（Friedrich Philipp Immanuel Niethammer, 1766-1848）はイェーナ大学教授（神学）。

目をということをやってのけることができたのであろう。

しかしながら，この問題において事情は一緒とするなどということに，どうにかすれば思い及ぶことくらいはできるとでも言うのだろうか。何よりもまず言っておきたいのだが，ニコライが正しかったわけでも，彼の側に真理があったわけでもないのではないか。いや，おそらくは真理に対する熱意が高じて無遠慮なののしりの言葉が彼の口から漏れたのだとしても，そのことは彼にけちをつけるべきことだったのではないか。敵対者たちが弁護していたのは誤謬ではないし，彼らが誤謬だと言われたわけでは断じてなかったのではないか。彼は私たちの誤謬を糺して真理へともたらしたいわけではないのに，その上だれかを罵倒して叱りつけるまでのことをするなんて，あべこべで無礼なことをするにも程があろう！　さらに言えば，ニコライは老人で，かの物書きたちは若者だったのであり，年寄りはそうしたければ若者を罵倒して叱りつけてもよいが，若者の方は罵倒し返すことを控えて身を引かなければならないというのがニコライ派の年寄りの物書きの間で取り決められた真理ではあるまいか！　年寄りに対する敬意，この学派ではこれが重要だったのだ，老人が年をとった馬鹿である場合でさえも。── ニコライはすべての物書きの中の老大家に任じられていたのではなかったのか。若者をあらゆる手段を使ってよきものに育てることが彼自身はっきりと表明していた自分の特別の仕事ではなかったのか。こうした手段のなかには激しいののしりの言葉も入れることができたのではなかったのか。するとどうだ，こうした若者は人の忠告を入れる代わりに罵倒し返したのだ。何という不服従だ！　手短に言おう。ニコライが罵倒して叱りつけたのであれば，それは適切な場で適切な時に行われたのであり，巧みな罵倒だったのである。別のものの罵倒の場合には，卑しく粗野なものだったのだ。ニコライだけが罵倒して叱りつけるすべをわきまえていたのであり，したがってこれを彼の専売特許にしなければならなかったのだ。

## 原注

（1），（2）先に挙げた『新ドイツ叢書』の紹介書評の 147 頁参照。

## 408 第9章　我らが主人公は，同一の異議申し立てを受けた場合に，自分の最高原則に基づいて，どのような態度をとるのを常としていたのか

自分のことをだれもが時代の第一人者だと認めているという我らが主人公の意見が確固としていて揺るがなかった分だけ，だれしも他者がいることを認めざるを得なかったということだろう，彼を見舞った災厄，すなわち，彼のことを自分たちと同じ中位にランキングすることすら適切だとはあまり認めたくないという声もしつこくつきまとっていた。彼の叢書は人気が出るのが非常に早かったのだが，その分やはり，公衆の大部分が彼は例のごとくその叢書を刷らせたのかといったこと以外にあまり知らないというありさまであった。彼に対する世間の見立てはせいぜいのところ，勤勉な出版業者[訳注11]だったのであり，多くの本が彼の手で出版されていたので，他のどの出版業者も同じだが，本について一緒に話すことができると思っている学問のディレッタントだった。彼の理性的判断は，研究者としての研鑽を積んでいない出版業者にとってみれば，まだなおそこそこのものだったのだろう。彼は，老年になって何度も公衆の耳に入れていたことだが，実のところは研究者としての研鑽を積んでいないたんなる出版業者などではなく，大まじめに言って偽りのない本物の学識者だと自認していたのだ[訳注12]。それにもかかわらず，彼は生涯のどの時点においても公衆のなかで，彼の時代においてはおよそ10年間通して勤勉かつ持続的に本を執筆していた学者ならだれでも獲得していた類の評判を得ることはなかった。

---

訳注11　アカデミー版の編者によると，カントとニートハマーの見立て。Vgl. GA I/7, S. 408 Anm. 1.

訳注12　特に，ニコライ『私の勉学修行時代について』（*Ueber meine gelehrte Bildung, über meine Kenntniß der kritischen Philosophie und meine Schriften dieselbe betreffend, und über die Herren Kant, J. B. Erhard, und Fichte. Eine Beylage zu den neun Gesprächen zwischen Christian Wolf und einem Kantianer,* Berlin und Stettin 1799）を参照。Vgl. GA I/7, S. 408 Anm. 1'.

このことは一部には災厄であったが，一部には自身の罪でもあった。公衆の過失に気づいた後，ただひたすら力を込めて，その叢書を刊行しているだけではなく，そこで書評も書いているし，もちろん編集もしていることを世間に広めることに集中していたならば，つまり，自分の名前を出してごたごたと書いたくだらないものに対して用心の上にも用心を重ねていたならば，彼はあるタイプの名声を，すなわち，有名な学術誌には自分自身で書くことを相当気をつけて避けているごくごくありきたりの編集者がずいぶんたくさんいるが，そうした他の編集者が博している名声をすぐに手にしていたことだろう。そうすれば私たちは，彼の年代記の作家として本章を追加せずに済んだのである。しかしながら，我らが主人公は本，しかも分厚い本を自分の名前で執筆し，そうすることによってすべてを台無しにしてしまった。

彼が書いた『ゼバルドゥス』[訳注 13] は確かにそこそこの出来だったのか　409
も知れない。この本はあまりにも刊行された時代にふさわしいものだったので，我らが主人公の能力でこれが書けるとは信じることさえできないと主張されていた[訳注 14]。私の読者のなかにはあの頃かなりあまねく広まっていた噂が耳に届いていなかった人はおそらくあまりいないだろ

---

訳注 13　ニコライ『マギスター，ゼバルドゥス・ノートアンカー氏の生涯と意見』（*Meinungen des Herrn Magister Sebaldus Nothanker*, 3 Bände, Berlin und Stettin 1773-1776. 以降，『ノートアンカー』と略記）のこと。フィヒテは本書のタイトルを，『ノートアンカー』のタイトルを捩って付けた。Vgl. GA I/7, S. 409 Anm. 2.

訳注 14　シュタルク『18 世紀における哲学の大成功』第二部（*Der Triumpf der Philosophie im Achtzehnten Jahrhundert*, 2. Teil, o. O., 1804），81 頁，参照。「ゼバルドゥス・ノートアンカーは，これにかんして若干のものが断言しているように，エーベルハルトが大部分共同執筆したものである」。アカデミー版の編者によると，シュタルク（詳細については訳注 20 参照）はエトヴィーン・ユーリウス・コッホ（Edwin Julius Koch）のことを指しているとのことである。また，フォン・ブレートシュナイダー（Heinrich Gottfried von Bretschneider, 1739-1810）も著者とみなされていた（Vgl. Richard Schwinger, *Friedrich Nicolais Roman „Sebaldus Nothanker“. Ein Beitrag zur Geschichte der Aufklärung*, Weimar 1897, S. 155-156）。Vgl. GA I/7, S. 409 Anm. 3.

う。あの，「ニコライは断じて『ゼバルドゥス』の著者ではなく，法に触れるかたちでそう詐称していたのだ。本当の著者はつねに金に困っている学者で，このニコライの盗作を脅迫のネタにして，この作品の知名度を上げることを無理強いしては，いつでも必要なときに彼から金をゆすり取っている」という噂のことである。私たちがたった今このような噂を取り上げたのは，私たち自身は彼のことを信じているといった体を装うためではない。── あの作品にはあまりにもはっきりとニコライの筆の特徴が出ている。── そうではなく，公衆が昔から我らが主人公のことをどのように思っていたのかを示すためである。

続いて刊行されたのが『ジョン・バンクル[訳注15]』である。これは，我らが主人公が断言しているところによると，彼が自分で執筆したものではなく，翻訳したものであった。しかしながらこの本は出来の悪さで人目を引いたのであり，それゆえ先程の作品では疑問視されていた作者の資格が今回の作品では彼に認められたのだ。つまり，何がなんでも彼はたんなる翻訳者ではなくて原作者そのものであるべきだし，そうでなくてはならなかったのだ。そして，彼がしたことはあくまで翻訳であることがもはやこれ以上否定できないという段になったとき，だからといって彼の状況はいささかも好転していなかったのである。徹頭徹尾奇抜で，残念ながらそれほど知られていなかった『若干のうすのろたち［ロバ］の物語[訳注16]』の著者が当時すでに，我らが主人公の物語に対してすばらしい貢献を始めていたのだ。

次に我らが主人公は旅行に出かけた。その旅路で，これまでプロテス

---

訳注15　本書第7章の訳注18（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第19号，2020年3月，64頁）参照。

訳注16　『若干のうすのろたち［ロバ］の物語 ── 世界的に有名なジョン・バンクルの生涯と意見続編 ──』（*Geschichte einiger Esel oder Fortsetzung des Lebens und der Meynungen des weltberühmten John Bunkels,* 3 Bände, Hamburg und Leipzig 1782–1783）のこと。匿名の作者はアンドレーアス・リーム（Andreas Riem, 1749–1807）：1782年からベルリンの聖職者。1789年に職を辞して芸術アカデミーの理事となり，1791年にはヘルフォルトの司教座聖堂参事会員に。1793年にプロイセン諸州から国外追放された。Vgl. GA I/7, S. 409 Anm. 5.

タントのベルリンとプロテスタントのライプツィヒと自分がかかわっている書籍見本市の間で精力的に活動していたベルリンっ子はカトリックの諸州を回ることになった。そこで彼は大通りに面したキリスト磔刑像，聖人像や聖人画，護符，奉納額を見たのであり，聖人のなかにはある種の国難や病気の守護聖人もいることを聞いたり，善意のカトリック教徒であるためには，自分の宗教は自分だけにしか至福を与えないので，すべての人間をその宗教のふところに招き入れようと努めねばならない，などといったことを聞いたりした。── そのようなものを，彼はベルリンやライプツィヒでは見たことがなかった。だから，見たことのある他の人からそうした類のものの話を聞いた場合には，ほら話や質の悪い冗談くらいに思っていた。なぜなら，そうは仰るが，どのようにすればどこかにベルリンやライプツィヒと違ったものがありうるということになるのだろうか，一体全体どのようにすればカトリック教徒らしいカトリック教徒になれるというのか，そんなことはありえないだろうというふうにしか思えなかったからである。今や彼は目の当たりにしてしまったのだ。そして息も絶えだえに神聖ローマ帝国じゅうに大声でこう触れ回ったのだ。「聞きたまえ，ドイツ人よ，聞きたまえ。不幸な話なんだよ。── 感覚が鋭いから見つけてしまうのさ。いるんだよ，まったくねえ，いるんだよ，カトリック教徒ってやつがさあ。いいかい，そこにいるのはこれぞカトリックってやつらなんだよ」。── そして自分の話をなんとしてでも信じてもらうために，ありとあらゆる聖人画やお札をありとあらゆる地域から山のように持ち帰り，おまけにそれらを手土産として持たせていたのである[訳注 17]。

410

---

訳注 17　『1781 年におけるドイツ・スイス旅行記』（*Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz, im Jahre 1781. Nebst Bemerkungen über Gelehrsamkeit, Industrie, Religion und Sitten*, 12 Bänden, Berlin und Stettin 1783–1796）参照。特に，第 6 巻，Ⅵ，Ⅶ頁，参照。「大部分のプロテスタントは，カトリック諸国で見られる聖職者どもの態度や信者たちの信心に凝り固まった様子をあまりに軽蔑しており，ときにはあまりに知らないことでもあり，そうしたものについて話を聞いたとしてもまったく無駄なことだとみなしている。とっくの昔に根絶やしにされたと信じていたものが私たちの世紀においていまだに幾何かの尊敬を集めうる

それから間もなく彼の叢書のことで彼の身に不愉快なことがふりかかった[訳注18]。この叢書は，── ついでに言っておくと，これはあまりにも真実であり歴然としていることなのだが ── この叢書は宗教にとって危険な仕事だということだった。これは彼にとってはむずかしすぎて理解できなかったのである。とんでもない，この仕事は，彼の最高の知からすれば徹頭徹尾，彼が最も純粋な意味でプロテスタンティズムと呼んでいるものにあふれていたのだ。もっぱらあの旅行以来今や明るみに出たアンチプロテスタンティズムにとってのみ，すなわち，カトリック的な宗教にとってのみ，その仕事は危険なものたり得たというわけである。二つのものの見方が彼の非力な頭の中ではごっちゃになっており，さらには第三の，それだけですでに彼を混乱させることのできたものまで一緒くたにされていた。すなわち，秘密結社，黄金薔薇十字団のものの見方である。それで，彼の叢書に敵対する者は，秘密結社や別の策謀を通じてプロテスタントをローマ教会のふところに引っ張り込もうと努める隠れカトリック教徒以外の何ものでもありえなかったのであり，彼は自分の叢書と旅行での重要な発見によって彼らの前に立ちはだかっていたのだ。そしてこれからはすべてにおいてそうした陰謀が渦巻いているにちがいなかったのである。1800 年の段階ではニコライはまだ，彼が再び

---

などということを，彼らは信じたくはないのだ。だから，彼らにそうしたものについて何か話をするような輩のことを，彼らは夢想家とみなしたり，まったく無駄なことをするやつだと見たりしている。彼らはそれどころかこんな甘い夢に浸りすぎているのかもしれない。50 年来，プロテスタントの場合は哲学およびより理性的な聖書釈義によって非常に大規模に進行してきた啓蒙への歩みによって，カトリックの場合にも宗教概念がまったく別の，もっと好ましい方向に転換しただろうという甘い夢に。彼らは知らなかったり，じっくり考えていなかったりするのだが，カトリック世界の 10 分の 9 ではいまだに，ルターがきわめて男らしく勇気をふるって戦った［敵である］あらゆる教義と濫用が罷り通っているのである」［傍点大文字］。Vgl. GA I/7, S. 410 Anm. 6.

訳注18　プロイセンの 1794 年の政令で『ドイツ百科叢書』が宗教的に危険だとして差し止め命令を受けたこと。ニコライが『新ドイツ百科叢書』第 56 巻第 1 号の「序文」，5-40 頁で詳しく述べているのを参照。Vgl. GA I/7, S. 410 Anm. 7.

編集することになった叢書の第 1 号の序文で，大まじめに古いおとぎ話を語っており，彼がこのようなものの見方を採るようになった本当の理由と異議申し立てについてひたすらまっすぐに書き立てていた。異議申 411
し立てとはすなわち，当の彼と彼の叢書が前政権の統治下でひとりの大臣[訳注 19] と若干の宗教評議会評議員から異議申し立てを受けねばならなかったことである。あのカトリシズムの伝道者を自称するものたちだが，彼ら自身がカトリックに改宗していたなどということもなく[訳注 20]，ましてや他の著名人をカトリックに改宗させたことなど，といったところからいくと，彼らは我らが主人公に対して好意的ではなかっただけなのだ。あのように激しく大騒ぎしているので一緒になってこころを奪われていたものたちも，警告されていた事柄にかんして何も起こらず，自分たちも比較的冷静になったらやはり，ニコライが自分たちに語っていたことはすべて以前からすでに見聞きしていたことであり，世間のほとんどの人がそうだったということを思い起こさねばならなかった。そして，こうした事柄を非常に重要なことだと受けとめ，非常に鋭い推論を展開することが我らが主人公だけに委ねられていたことをいぶかしく思い，一体どうして自分たちの場合は同じ大前提から出発しても同じ発見に至ることがなかったのか思案しなければならなかった。そうすれば全部，我らが主人公についてみんなそろって大爆笑して締めくくることができたのだ。

なおも彼の身には人生の悲しい時期がまた別に迫っていた。最近の哲学撲滅運動である。なるほど，この最近の哲学に対する彼の抗弁は次のようなものだった。── たとえば，感性界の現象は，なんと，いつもはど

---

訳注 19　ヨーハン・クリストフ・フォン・ヴェルナー（Johann Christoph von Wöllner, 1732-1800）：1788 年からプロイセンの宗務局長官にして司法大臣。Vgl. GA I/7, S. 411 Anm. 7'.

訳注 20　フィヒテがここで念頭に置いているのはおそらく特にこの人物である。ヨーハン・アウグスト・シュタルク（Johann August von Starck, 1741-1816）：1776 年までケーニヒスベルクの管区総監督，宮廷説教師長，ケーニヒスベルク大学教授（神学），1777 年にミタウの教授（哲学），1781 年にダルムシュタットの宮廷説教師。Vgl. GA I/7, S. 411 Anm. 8.

の現象もその前では消えて無くなるはずのチスイビル[訳注21]の前でさえ
412 も消滅することはないのだ。あるいはまた，現に存在するものがすべて

[訳注21] Vgl. Gustav Friedrich Konstantin Parthey, *Jugenderinnerungen*, hrsg. von Ernst Friedel, 1. Teil, Berlin 1871, S. 41 ff.「フィヒテとのいざこざをきっかけとしてニコライは［…］1799年のアカデミーでの原稿発表で，［…］しばらくの間彼を悩ませた幻覚にかんするあの珍しい報告を行った。ニコライは息子のカールのことで激しく腹を立てていると，みずから命を絶った息子のザムエルが突然目の前の机の向こう側に現れた時，かっとなってしまった。彼は少なからず驚愕し，隣にいた妻に，彼女も今は亡きザムエルの姿を見たかどうか尋ねた。［それを聞いた］彼女はより一層驚愕したが，当然ながら何も見てはいなかった。ニコライは今度はしっかりと視線を固定してその現れた姿を見ると，消えて無くなってしまった。彼はこの件はこれですっかり片づいたと思ったが，幻影は繰り返し現れたのである。存命中の人も亡くなった人も，どうしてだかわからないが，彼の部屋に現れたのだ。ある日のこと，机に向かっていて後ろを振り返ると，部屋の隅のソファーに亡くなったザムエルが座っているのが見えた。彼はそちらへ2歩近づいたが，ザムエルは座ったままだった。さらに2歩行っても何も変化は起こらなかった。彼は間際まで寄って身をかがめて上に覆い被さろうとしたすんでのところで，ザムエルは消えて無くなってしまった。信じられないくらいの働き者だったため，ニコライははじめのうちは医者に相談する時間がなかった。それで次第にこのような招かれざる客に慣れていったが，存命中のものが部屋に入ってきた場合には，ほんのときおり，実物か幻像かはっきりしないこともあった。そのうち彼は幽霊を見分けるコツも摑んだが，そのポイントは，幽霊はドアを開け閉めして出入りする際にけっして物音を立てないということであった。しまいには，人影は彼と話し出すことさえあったという。目の幻覚に耳の幻覚が伴ってきたのだ。亡くなったものとの間で実際に行われた対話を彼岸の世界からの声明として考察し，これを周知することができたなんて，あまり頑強でない精神にとって，何ともはや栄誉に満ちた機会であったことよ！　もしニコライが最終的に，医者の助けを求めて目的に適った方法でチスイビルを使うことによって幽霊現象を一掃していなければ，過敏な神経系の病的な興奮状態がどこまで悪化していたか，だれにもわからないだろう。そうした現れは話さなくなり，次第に鮮やかな色彩を失っていき，白いお化けとなって，真っ二つに分かれ，胸像部分が空中を漂いながら通り過ぎるようになり，とうとう完全に消えて無くなってしまったが，ここに至るまでにこうした感覚器官の不思議な変調はおよそ2ヶ月間続いた。［中略］こうした幻影そのものよりももっと妙なことだと言ってしまっていいくらいに私には常々思えるのは，

自我そのものだとすれば，イノシシのもも肉を食べる人間は自分自身を食べることになってしまうことになろう[訳注 22]。── こうした抗弁はすべ

---

ニコライがそうした幻影をあの報告の出版のきっかけとなったフィヒテの非我に適用したこと自体なのだ」。併せて，クリストフ・フリードリヒ・ニコライ「さまざまな幻影からなる一なる現象の例 ── 若干の概説的注釈を添えて ── (1799 年 2 月 28 日にベルリン王立科学アカデミーにて読み上げられた)」(„Beispiel einer Erscheinung mehrerer Phantasmen; nebst einigen erläuternden Anmerkungen. Vorgelesen in der K. Akademie der Wissenschaften zu Berlin, d. 28. Hornung 1799“, in: *Neue Berlinische Monatsschrift*, 1. Bd. 1799, Berlin und Stettin 1799, S. 321-360) 参照。ニコライはそこでフィヒテの哲学，なかでも特に「訴える」に対して論難を加え，彼の講演をこう結んでいる。「私の自我の産物は，なるほど私の表象にも含まれているし，フィヒテ教授殿の表象も彼が私の前に立っている場合には同様だが，しかしながら，こうしたものはみな，私の場合には頭とは正反対の側［すなわち尻］に 6 匹のチスイビルを貼り付けて根絶やしにすることができることからして，今現在夢想に悩まされているこの哲学者のこのような経験的自我の実在性を持つことはないのだ。私がこのように結論する理由は，私がフィヒテ氏のことを考える時には，もっぱら私の表象のうちにのみ存在するわけではないものを思い浮かべねばならないからである。この結論は，私の内なる救済の秩序だけから私の外の現象の現実存在を推論しようとする場合よりも説得力のあるものだと思う。そうした推論を採れば私は，現象と 6 匹のチスイビルが吸い出し尽くせる程度の実在性を有する幻影とを区別できないなどということになってしまうだろう」(S. 359 f.［傍点イタリック］)。Vgl. GA I/7, S. 411 f. Anm. 8'.

訳注 22　Vgl. NADB, Bd. 56, S. 174 f. Anm.「ひょっとすると，人は以下のようであってほしいという誘惑に本当に陥りかねないのかも知れない。お高くとまっていて思い込みを垂れ流す我らが観念論の哲学者たちは，自分たちの哲学にとって「もっぱらみずからの自由な思考と意欲のみによって規定される，自由で自立した存在であること」ができるのであり，彼らの思い込みでは，自分たちの純粋自我は，この自我が理念から出発して客体へと進むことで全自然を創造し，まさにそうすることによって全自然から独立するということを自分自身に対して定立するのである。これ以外の弁証法的形式を彼らが自分たちの穴の空いたいす（chaise percée）に持ち込むことはない。仮に，フィヒテ氏がたとえば野ウサギのローストを，あるいはシェリング氏がイノシシのもも肉をあまりにもたらふく食べ過ぎており ── 何しろこれは最もまじめな哲学者の身に気づかれないうちに起こりうることであるから──，フィヒテ氏は，最新の哲学を偉大な

て，ローマ帝国における下僕の男女であったとしてもだれしも，帝国に審問されている際に自分たちもおそらく同一の抗弁を申し立てることができるだろうと思っているはずという類のものだった。しかしながら，我らが主人公は彼ら［最近の哲学者たち］がそうした抗弁をこのような仕方で口走ることの方は禁じるというひどいやり方を取り，自分の方は彼らの好意に身を任せたのである。おまけに，彼らすら聞き及んでいないことであったが，あの御用哲学者たちは気狂い病院に送り込まれたのであり，こうしたことは，御用哲学者たちの主張がああした抗弁によって図星を指された場合には，必然的に起こらねばならなかっただろう。したがって人々は，ああした［最近の哲学の］弁論にはおそらく別の意味があって，ニコライがその意味を理解していなかったり，かなり悪意に満ちた仕方で曲解しているだけなのだろうと受けとめる傾向をますます強め続けていた。こうしてごく普通の読者の場合でさえ，この種の論争はあの哲学者たち［最近の哲学者たち］の名誉よりも我らが主人公の名誉をはるかに大きく傷つけたのである。

こうした相互に関連する一連の不幸な事件により，確固とした信用を得ることのなかった我らが主人公はますます軽蔑され，嘲笑されることになった。晩節の 1803 年以降は，彼はすっかり落ちぶれてしまい，おもしろい暇つぶしにまったく恵まれなかった悪ふざけの好きな輩が誰彼無

---

公衆に理解させるという人間の使命ないし義務に思う存分全力を尽くしたいと思っていたが，今やまったくできなかったし，シェリング氏は『一般文芸新聞』に対して罵詈雑言を浴びせる文章や自然学のカテゴリーの演繹をさらに執筆し続けることができず，最終的には筆を放り出して［健胃剤である］ダイオウに手を伸ばさねばならなかった，としよう。このような場合，これらの偉大な観念論者のいずれもわずかばかりのダイオウや安楽椅子に頼るのではないだろうか。［彼らに言わせれば，］安楽椅子という内容はダイオウの自由な活動の第一の勢位（ポテンツ）によって定立されるが，そうした内容が現実的にどこにあるかというと，―― おそらくフィヒテ氏やシェリング氏がこのように仮定した事例について考えているであろうように ―― 彼らの純粋知性そのものの内などということはとんでもないことだし，先に述べたように，彼らの感性化作用そのものの内でもなく，彼らの知識学や思弁的自然学がどれほどこの点に反論しようとも，現実的にまったくもって彼らの表象の外部に現存するのだ」［傍点大文字］。Vgl. GA I/7, S. 412 Anm. 9; GA II/5, S. 450 Anm. 12.

しに年老いたベルリンのアイベックスをひやかしに来て，ひげを引っ張るといったいたずらに興じていた。

さて，我らが主人公はこういった場合にはどのような態度をとったの 413
だろうか。時代が彼のことを時代の第一人者とみなしていないことについて，彼は一体合点がいかなかったのだろうか。もちろんまったくもって。こうした予感に対して彼はすでに比較的早い時期から確固とした態度を示していた。

彼への罵詈雑言を聞き流してもらうことがとにもかくにも期待できる場合に彼は，むしろそうした罵詈雑言に一切言及せず，寛大にも黙認しているという体でやり過ごすのを常としていた。だから無論のこと，超越論的観念論者の学派のなかには，彼に対してしばしば多少なりとも失礼なふるまいをするものもいくらかはいたのである。フィヒテは一度だけ，彼がフィヒテに言及したので，彼に対してため息野郎という性格付けを行った[訳注 23]。シェリングはかつて一度彼のことを［辺境］カリフォルニアの年寄りとののしり，別の折には頭のおかしなじじいとなじっていた[訳注 24]。ニートハマーはそれどころか —— 確かに根拠づけを欠いたもので，ずっと後の方で論駁しなければならない —— 仮説まで表明した。すなわち，ニコライは今は気が変になっている，とか，彼はベツレヘム精神病院の［自称］父なる神で，隣にいる［彼が言うところの］イエス・

---

訳注 23　フィヒテ「哲学的基調年史」（„Annalen des philosophischen Tons“），『哲学ジャーナル』（*Philosophisches Journal*, Bd. 5, Ht. 1, Jena und Leipzig 1797, S. 100 Anm.）参照。「この基調［cf. フィヒテの基調］にはおそらく何らかの怒りが含まれているにちがいない。なるほど，こうした基調に対する異論としてさらに，野郎どものため息が上がっているわけである。たとえば，ニコライがそうで，彼と語り合うことは果てしなく退屈なことであり，それゆえ私たちはそんなことはご遠慮申し上げている」（GA I/4, S. 311）。Vgl. GA I/7, S. 413 Anm. 10.

訳注 24　シェリング「最新の哲学文献概要」（承前）（„Allgemeinen Uebersicht der neuesten philosophischen Litteratur“ (Fortsetzung)），『哲学ジャーナル』（*Philosophisches Journal*, Bd. 5, Ht. 2, Jena und Leipzig 1797, S. 166 Anm.）「［辺境］カリフォルニアの年寄りが指摘している最新の哲学が持つ革命的傾向とひねくれた特徴 —— 悪評の高い旅行記の第 11 巻に見られる —— を参照」。Vgl. GA I/7, S. 413 Anm. 11.

キリスト ── たとえば，リッター・ツィンマーマン[訳注25]に対して歯を剥き出しにしているのだ[訳注26]，といった類のものである。それにもかかわ

---

[訳注25] ヨーハン・ゲオルク・リッター・フォン・ツィンマーマン（Johann Georg Ritter von Zimmermann, 1728-1795）：医者。ニコライは彼に対して，みずからの著作である『フリードリヒ大王にかんするリッター・フォン・ツィンマーマン氏の断章についての率直な所見』第2編（*Freymüthigen Anmerkungen über des Herrn Ritters von Zimmermann Fragmente über Friedrich den Großen*, 2. Abt., Berlin und Stettin 1791 u. 1792）で論難を加えていた。Vgl. GA I/7, S. 413 Anm. 11'.

[訳注26] ニートハマー「実質的な道徳原理における合理的なものの叙述の試み」（„Versuch einer Darstellung des Vernunftmäßigen in den materialen MoralPrincipien“），『哲学ジャーナル』（*Philosophisches Journal*, Bd. 5, Ht. 2, Jena und Leipzig 1797, S. 123-124）参照。「[…と] 同じくまったく議論の余地のないことだが，このクラス [cf.「普通の人間」] のなかのごくごく一般的な層の場合ですら，普通から抜け出して上に昇ることに躍起になってあまりにも過度な努力をするあまり自分自身を飛び越えて異常なものになってしまったいわゆる学識者たちの場合よりも，普通の人間悟性の純粋な発言がはるかに期待できるのだ。── この手の人目を引く実例のひとりがベルリンの出版業者ニコライ翁である。彼にとっては意に適っていることがすべてにまさっている ── [こうした尺度は] 一部には，自分は異常なまでに努力しているという感情に起因している ── のだが，この意に適っている [という尺度] 自体（これこそ長年にわたって加速度的に彼を蝕んでいったと見受けられる悪である）によって少し前に彼は実際に，自分の質料的自我が完全に固定観念になってしまい，それ以来「形式的なもの，すなわち自我とそれとは別ものの非我」という表現をどのような人間が使おうとも，そんなことを耳にしようものなら必ず歯を剥き出しにして，その人間に ── かの，ベツレヘム精神病院の [自称] 父なる神が隣にいる [彼が言うところの] イエス・キリストに対してかかっていく場合よりもはるかに嘲笑すべき仕方で ── 襲いかかるようなありさまなのである。── このような結末にならざるを得なかったとは，そうした人間は気の毒だ。しかしながら，彼自身のために公の場で，それはそういうものだということを思い起こしてもらわねばならないのだ。そしてそれは，彼が不正を受けないようにするためなのであり，無礼な罵詈雑言や陰険な誹謗中傷（彼の真理への愛の子供たち，こうしたものをそんなふうにニコライ翁は呼んでいるのだ！）の責任を，こうした言葉を浴びせることによって尊敬を受けているものたちに襲いかかるのをやめない彼の性格に帰せて書くためなのだ」[傍点ゲシュペルト]。Vgl. GA I/7, S. 413 Anm. 12.

らずニコライは，後からこうしたものどもに対して他の不正のことで厳しく叱るきっかけがいつ与えられようとも，彼自身に加えられたこのような侮辱について言及することさえけっして許さなかった。むしろ彼はいつでも断固として，あのものどもはもちろんのこと彼の指示に留意し 414
ているし，教えを乞い求めてこれに従い，そしてこうした指示によってきっとそのうち正気に返ることだろう，と決めてかかっていた。ティーク[訳注 27]は，ほとんどすべての著作のなかで，非常に手厳しいやり方で，これぞ本当の機知あふれる冗談と言えるような深く突き刺さる言葉遣いで彼を嘲弄していた。そうではあるが特筆すべきものを挙げると，彼が主宰している『詩学ジャーナル』（*Poetisches Journal*）の第 1 分冊に登場した，我らが主人公に瓜二つの老人[訳注 28]になる。また，同分冊の「最後の審判」では，ニコライという実名で非常に滑稽な姿が描かれていた[訳注 29]。こうしたことによって我らが主人公が侮辱を受けることはあま

---

訳注 27　ヨーハン・ルートヴィヒ・ティーク（Johann Ludwig Tieck, 1773-1853）。

訳注 28　ティーク「岐路に立つ新しいヘラクレス ── ひとつのパロディー ──」（„Der Neue Hercules am Scheidewege, eine Parodie“, *Poetisches Journal*, 1. Jahrg., 1. Stück, Jena 1800, S. 81 fg.）参照。特に 110 頁以下，中でも 113 頁。「内側に感じおるのは胃ばかりで／外なるものは，げに恐ろしき夢幻覚／而して貴殿，ご所望ならば少々の，天賦の才をお目に掛けよう」。Vgl. GA I/7, S. 414 Anm. 14.

訳注 29　同書，「最後の審判」（„Das jüngste Gericht“, ebenda, S. 221 fg.）。「老ニコライはいまだに地中に埋まったままであった。今や純粋な永遠の始まりだと聞いていたので，絶対に立ち去りたくなかったのである。彼は何だか知らないが創造の賜物である純粋なものだけは断じて身に纏いたくなかった。それというのも，この純粋という概念に対して和解に至ることのない憎悪を抱き続けると誓っていたからである。［中略］彼は石の層をますます深く掘り進めてその中に身を埋め，何の遠慮も無しに，こんなに惨めなかたちで再び生き返ることは彼の教養が許さないと主張していた」（S. 231-232）。「最後の審判はそうこうしているうちにすでに始まっていた。ニコライは教養があったにもかかわらず，向こう 2000 年間，一言も発することなく悪魔たちの冗談を傾聴する刑を宣告された。彼はすべてを幻影や過度の想像力の産物だと断言し，不適切な詩情を吸い出させるために，気づかれないようにチスイビルを前もって貼っていた。そうして彼は尻にチスイビルを貼って審判の場に立ち，判決を受けた。性懲りもなく彼岸の世界まで持ってきた彼の世界を示すために丁重にお辞

りなかったので，あの分冊をみずから批評する[原注(1)訳注30]ほどの冷静さを保持していた。なるほど彼は，彼を厳しく批判した二つの文章が何の役にも立たないことを伏せておけなかった。しかしながら，後で見るように，それらの文章に見受けられる，文字どおりの意味では当てにならないまずい箇所にほんのわずかだけ触れるというのは十分に慎重なやり方だった。

415 しかしながら，あまりにも大きくて良識のある社会で過失が犯されたうえに，それが地上で起こったことが想定できていない場合には，我ら

---

儀をしながら。「奇妙だぞ」，彼は，サテュロスたちがすでに彼を罰するために辛辣なアイデアに思い至ってあれこれ思案している最中に，独りごちた。「やはり奇妙だぞ，天敵［チスイビル］が常軌を逸したものをすべてまったく心地よさそうに吸い込んでいるにもかかわらずこれらの幻影が消えて無くならないなんて。皮肉だなあ，野獣たち［チスイビル］は，とにかく塩をかぎつけさえすればすぐに私を解放するなんて。まあそうは言っても，最後の日々にこのようにして私に現れたものをすぐに友人のビースターに知らせねばならないし，『ベルリン月報』に，しかもこんなコメント付で載せた方がいいなあ。〈私がこの世紀と歩調を合わせたとたん，チスイビルは踵を返し，その力を失って，お化けの存在さえも信じるようになったと思われる〉なんてね」。次いで，サテュロスが数名で彼を将来の住処に送り届けるために連行した」（S. 234-235）。「そうこうするうちに大騒ぎが起こった。なぜなら，数匹の悪魔が姿を現し，教養あるニコライはむしろ天国なり他の場所なりにもらい受けてほしいと頼んできたからである。彼はあまりにも法外に退屈な男で，また，まったく黙っていることができないので，その結果，どの悪魔も彼には我慢がならず，地獄の業火さえも消える恐れがあったからである。無限の慈愛が心を動かされ，彼には虚しさの国送りの刑が申し渡された。そこは生と死の狭間にある谷で，天国でも地獄でもなく，厳密に言えばけっして現実に存在しないところだった。彼は喜んでそこに行き，そこで愉快にやりたいんだ，何せ昔の祖国だし，復活したときに一番残念だったことなんだけど，そのことを忘れちゃってただけなんだからさ，と言った。そもそも裁判官の判決はもう出てしまったのだから，けっしてそこに存在することはなく，また，私がまったく承知していない野郎どもについて判断を下すことによって，もはやこれ以上高貴な永遠を貶めないようにしよう」（S. 236-237）。Vgl. GA I/7, S. 414 Anm. 15.

[訳注30] 本書の「序論」の訳注４（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第17号，2018年３月，107頁）参照。

が主人公はつねに，敵対者たちがそこで話したように話さざるを得なかった理由を見事に明らかにするすべを心得ていた。つねにはっきり示されたのは，彼がもっと早くに敵対者たちを厳しく批判して彼らの自己愛の感情を傷つけていたこと，彼らはもっぱらその恨みを晴らしたいとしか思っておらず，それゆえ彼らのこころの奥の本当の意見なら異論を唱えるはずのことを申し立てているのだろうということである。ご存じの『クセーニエン[訳注 31]』において描かれている我らがニコライにかんする冗談は，彼にかんするそうした話が十分に否認できるものではなかったにせよ，実際には極端に走っていた。しかしながら我らが主人公は，あの詩の著者たちが彼の旅行書の第 11 巻によって負わされた深手の恨みを晴らすためだけに出版したのだと言ってのけたのである。「無論のこと，彼が彼らに対してそこで言っている真理に喜んで耳を貸すものはいないし，できる限り恨みを晴らしたのだとすれば，それは彼らにとってはまさしく気分の悪いことではない[訳注 32]」。それはそうと，彼は知っていたのだ。彼らが彼のことをこころでは尊敬していることを，彼のことを自分たちの師と認め，彼のことを非常に恐れていることを[原注(2)]。

そう言えば彼は超越論的観念論者たちについて，『ドイツ叢書』を軽蔑しているように装っているだけだと言っていた[原注(3)]。もちろん彼らは，粗野で無作法な輩たちであり，尊敬されている人々のうちのかなりのものにとってはあまり敬意を示すことのできない，あの観念論者たちであった。しかしながら，我らが主人公の最も偉大な業績であるこの叢書のことを実際のところを言えば尊敬していないなんて，彼らでさえこん

---

訳注 31　『クセーニエン』（Xenien）（『1797 年版ミューズ年鑑』（*Musenalmanach für das Jahr 1797*）所載）。特に，Nrn. 84，142，143，144，184-206，238，334，339，340，355 を参照。Vgl. GA I/7, S. 415 Anm. 17.

訳注 32　『補遺論考』, 10 頁, 参照。「あらゆる状況を総合して判断すれば, シラー氏が非常に不適切だとみなしている率直さという一点のみによって私が, あの年鑑で非常にたっぷり頂戴している，愚かにしてひどいお持たせを自分の身に招いてしまったのだろうと危うく信じられてしまうかも知れない」。併せて 29 頁参照。「私は無論のこと，私が率直であるという理由で体面を傷つけるような厳しい批判を受けることに対して，予めこころの準備ができていた」。Vgl. GA I/7, S. 415 Anm. 18.

なあべこべなことができようとは，ニコライには思えなかったのである。ちがう，彼らはそんなふりをしていただけ，尊敬していないかのように装っていただけだ。なぜなら，かの叢書が博している喉から手が出るくらい魅力的な数々の評判は高尚すぎて彼らには理解できなかったのだから。

そう言えば彼は，先に引用したティークのジャーナルの書評でこう付言していた。「ティークはそこで，当の彼自身と彼の詩のことをおそらくは向こうの方でも気に入っていなかったと目される若干の人物にかんする不快感を表明している[訳注33]」。── 驚いたことに，こうした立場は，このジャーナルを読んでいないものにとってはあいまいなままであってもかまわなかったのだ。さて，一体何のために当のニコライ自身は残念ながら持ち上がってしまったスキャンダルを彼の叢書によって一層広めねばならなかったのか［わからない］。ただし，あのジャーナルに目を通した［彼の叢書の］読者のなかにどのような人たちがいようとも，そうした人たちは，ニコライがもっと早くにティーク氏になにがしかの苦痛を与えたのだろう，その報復としてティーク氏が彼に対する鬱憤を晴らし
416 たいと思ったのだ，と信じることしかできなかったのである。つまりそうした人たちは，ティークはこころの中では彼に対する尊敬の念で満ちあふれているわけではないようなそぶりを示しているのではなく，もっぱら彼に対して恨みを晴らすという意地の悪い理由でそうしているのだとしか思えなかったのである。

このようやり方で我らが主人公は，他のすべての場合においてはきっとそうなっていただろうと予期されること，すなわち，発狂していることが目に見えるかたちで現れ，市民生活に姿を見せることを免れていた。ニコライがリッター・ツィンマーマンと話したときのことである。ニコライは彼の虚栄心の分け前に比較的大きく与っていたにもかかわらずこ

---

訳注33　同書，201頁。「その幻影［cf. 最後の審判］は，たとえばティーク氏の詩のことを気に入っておらず，それゆえ彼のことも気に入っていなかったと目されるさまざまな人々に当てはまる」。Vgl. GA I/7, S. 415 Anm. 20.

れを受け入れることができなかった[訳注 34]のだが，ニコライも同じようにヴェルナー大臣と指すチェスを気に入っているという話題と併せて，彼が機知に富んだやり方で大臣の意向をはねつけたという話をした[訳注 35]のは，ツィンマーマンがフリードリヒ二世との会談について話してしまったときであった。── 哀れなリッターにかんしてはこれが悲しい結末になった[訳注 36]のであり，不幸なヴェツェル[訳注 37]にしても彼の神性が災いすることになった。それゆえ，我らが主人公にしても同じようなかたちの結末を迎えるのではないかと，多くのものが信じていたし，上述の学者[訳注 38]は，このような症状が実際に発症したとすら，以前には思っ

---

訳注 34　『フリードリヒ大王にかんするリッター・フォン・ツィンマーマン氏の断章についての率直な所見』第 1 編，8 頁。

訳注 35　Vgl. NADB, Bd. 56, S. 17 f. Anm.「参上はしたのだが，私自身はそのためにいかにしてあるアイデアをチェスにかんする会話の形態で（喜んで白状するが，私は当時のあべこべな宮廷内部の結社とのやり取りを無視していたわけではない）表現するのか，そして，最終的に 245 頁を掲載させるのか，そのすべを心得ていなかった。［245 頁にある］こうした軽い冗談は，まさにこうしたやり取りに非常に興味を覚えているような特定の人々からすれば，私がこれまで考えていたよりもはるかに不安にさせるものだったのだ。そうした人々のなかにはフォン・ヴェルナー氏という，私が 1765 年からかなり親しくお付き合いしている人物もおり，彼は私に，このような会話についてどのような意見を持っているのか説明を求めた。彼が私に対してあくまでも，このような会話とフリーメーソンの慣行との関連について完全に説明することを要求したので，最終的にはもはやこれ以上かわすことができず，私はとうとうこのように言った。『非常に偉大なフリーメーソンの会員にしてチェスの使い手に対してチェスないしはフリーメーソンの慣行について何か説明するなどということを，どのようにすれば敢えてすることができましょう！』 この言葉は彼に深いショックを与えた。彼はすでに偉大な人物だったので，それから長い間この言葉を非難し続けたのである」［傍点大文字］。Vgl. GA I/7, S. 416 Anm. 22.

訳注 36　フォン・ツィンマーマンは 1795 年に発狂した。Vgl. GA I/7, S. 416 Anm. 23.

訳注 37　ヨーハン・カール・ヴェツェル（Johann Karl Wezel [Wetzel], 1747–1819）：作家。1784 年から精神病を患い，1786 年からゾンダースハウゼンで暮らした。Vgl. GA I/7, S. 416 Anm. 24.

訳注 38　ニートハマーのこと。Vgl. GA I/7, S. 416 Anm. 25.

ていたのである。こういったふうに思っている人たちが見逃していたのは以下のこと，すなわち，発狂することができるためにはやはり正しい真実の思考内容がなにがしか抹消されずに残っていなければならず，このような思考内容が同じようにしっかりと根を張った正しくない誤った思考内容との間でけっして決着のつかない衝突に陥ることによって精神錯乱という現象が生じているということだけであった。しかしながら，総じて根底からあべこべだと，正しい思考内容がただの一つも結びついていないので，自分自身と合致しており，その在り方が真理と同じように確固として揺るぎなく，一様なものになるのだ。そうした人間は自分の思想の範囲内で自己完結しており，神であってもその中にぴったり納まらなかった思考内容をその思想の範囲内に持ち込むことはないだろう。── これに加えて，とりわけ，うぬぼれから生じるタイプの狂気で，自分のことを今ある姿とはまったく別のものだとみなしてしまうこのタイプの人間は，そもそももっぱら他人からの異論によってのみ興奮して
417 憤慨し，こうしたタイプの人間がかなり頻繁に突然発する，あの乱暴な表現をとろうとするということが挙がってくる。あのベツレヘム精神病院の父なる神とその息子イエス・キリストだけを厚い信仰心を持って賛美すること。彼らが世界の統治者であり，日々の天候を決めているという意見を持ちながら，彼らをただひたすらこころ安らかにしておくこと。そうすれば，彼らは非常に穏やかで慈しみ深い神性を保ち続けるであろう。異論だけが彼らを刺激するのだ。このような刺激から身を守るために我らが父なる神は，彼の馬鹿さ加減に根ざした手段をとった。彼はけっして異論がまじめな意見であるとは思わなかったのである。紙のようにもろい彼のオリュンポス山を登ってきて仕掛けてくる策略であれば，彼は乳香[訳注39]の煙とみなした。死すべき者どもが彼の支配下で彼の意に沿わない行動をとった場合には，彼は雷神の石矢だと信じ切っているものに手を伸ばしてそれを射掛けた。そして今や，彼を取り巻くすべてのものは粉砕され全滅したなどという確信のうえで揺らぐことがなかったのである。

---

[訳注39] 神性の象徴として，あるいは，神性を賛美するために焚かれた香。

馬鹿だったのはもちろん彼だった。なぜなら，研究者としての研鑽を積んでいない単純な出版業者が，体系的な教育をまったく受けておらず，学問の何たるかについてごくごくわずかなイメージすら持ち合わせていないくせに，あらゆる学者の中の第一人者を自称したり，生来の愚鈍な頭脳の持ち主が，たった一文だけでも文法的に正しく論理的に執筆するレベルにすら達していないくせに，全般的で並外れた才能の持ち主だと僭称したり，根っからのベルリンの野次馬[原注(4)]にして躾のなっていないとんまな口先だけ達者な輩が世間のことをよく知り世慣れている大人物と思い上がるなら，それは，哀れな靴直しが自分のことをイェルサレムの王とみなす場合と同じくらい馬鹿げたことだからである。しかしながら，彼はこのような狂気のうちであまりにも揺るぎなく自分自身のままに留まっており，彼の行動，信念，思考はすべてこの狂気とあまりにもよく一致していたし，相互にもよく合致していたので，もっぱら彼の発言だけを相互に比較していて，第一前提の尋常でない誤りに気づいていなければ，彼の最期のときまで悟性の錯乱のごくわずかな痕跡さえ彼のうちに見つけることができなかったのだ。

## 原注

（1）『新ドイツ叢書』の第 56 巻第 1 号第 3 分冊を参照。
（2）『クセーニエン』に異を唱えるニコライの著作を参照。
（3）『新ドイツ叢書』の上述の号の第 2 分冊[訳注 40]を参照。
（4）この名称にかんする私たちの見解については第四付録で明らかにする。

（第 10 章以降は次号以降に続く）

---

[訳注 40]　NADB, Bd. 56, S. 160.「彼らは［…］あらゆる機会を捕らえて『ドイツ百科叢書』のことを軽蔑しているかのように装っていた」。Vgl. GA I/7, S. 417 Anm. 19.